Rihoのドイツ便り

No.62

福島第一原発事故から一年

ドイツでも新聞やテレビで盛んに「福島第一原子力発電所の事故から1年」について特集を組んだ。日本が原発が2基（3月15日現在）しか動いていないことにびっくりする声も。　3月11日には「フクシマは警告する。原発をすぐ停止せよ！」を合言葉に、ドイツ各地で反原発デモが開かれ、合わせて5万人が参加した。私の住むニーダーザクセン州の州都ハノーファーでも7000人がオペラ広場に集まり、犠牲者に思いをはせ、反原発を訴えた。

ハノーファー市は広島市と姉妹提携しており、毎年8月9日に原爆の犠牲者を追悼する行事が開かれるなど交流がある。市内には10以上の平和団体があり、反核運動に取り組んできた。福島原発の事故では、広島の原爆投下を思い出した人も少なくない。市から南西45キロのところにグローンデ原発があり、日本のできごとはひとごとではない。

ドイツは2000年の社会民主党と緑の党の連立政権で2022年の脱原発を決定していたが、2010年秋アンゲラ・メルケル首相（キリスト教民主同盟）が各基8年から14年の稼動延長を決定した。しかし昨年の福島原発の事故を受け方向転換。再び2022年の脱原発を決めた。福島の事故が脱原発への国民の総意を確実にしたため、今後この決定が覆されることはないだろうといわれる。脱原発を決めたドイツだが、代替エネルギーの推進や、核廃棄物の処理など課題は多い。

北ドイツにあるゴアレーベンは高レベル放射性廃棄物の最終処分場として35年前に選定されたが、安全性が疑問視されており、政府はゼロから候補地探しをすることになった。すでに中・低レベル放射性廃棄物を保管しているアッセでは、岩塩ドーム崩落が危惧されている。これらはすべて北ドイツのニーダーザクセン州にある。もともと海だったことから、地中にある岩塩に埋め込もうという構想だ。法的には、最終処分場がなければ原発は稼動させてはならないことになっている。しかしドイツではゴアレーベンを選定し「もう処分地はあるのと同じだから」と稼動を始め、今に至る。厳密には違法行為なのである。

田口理穂　ごみかんドイツ特派員

ドイツで子育て♪

明は最近怖がり。「街の歴史」という絵本に、古代から現代までの様子が描かれている。中世には火事で街が焼け落ち、近代では戦争で爆弾が落ちてくる。これを見てから、いくら大丈夫だといっても「火は隣からくるかもしれない」「爆弾がすごーく大きかったらどうなるの」と始終心配している。別の絵本では、泥棒が入ってきたが、子犬の活躍で解決。「泥棒がきたらどうしよう。犬はいないし、鍵は大丈夫？」とさんざん聞く。4歳になり、世の中はばら色ではないとわかってきたか。

6月に里帰りを考えており「日本に帰ろうか」と聞いたら、「行かない。またフクシマあったら困るから」との返事。ラジオで耳にするし、反原発デモに行ったりしているので「フクシマ」はどうも危ないものだと思っているらしい。しょうがないので「日本にはおいしいチョコレートあるよ」といったら、「行く！」と豹変した。